

## フィリピン3泊4日刑事施設視察旅行報告

東京都日野市 長沼ゆり

桜の開花が待たれる3月21日(木)羽田出発グループ20名、名古屋グループ5名それに大阪から1名がマニラの国際空港にて、山下事務局長それに吉田事業部長と全員が合流した。その後予定通り都心のホテルにチェックインし、1時間ほど休息した。

間もなく2階に集合し、各自名札を首に下げながらフィリピン ACPF (CPPAP、正式名称はフィリピン犯罪防止実務家連盟)主催の歓迎パーティに出向いた。

会場は人々であふれ、フィリピン CPPAP のメンバーと共にフィリピン料理を堪能した。

この旅行の目的は「世界の安全と安心に向け海外の刑事施設事情を知る」ためのもので1年前から準備された企画だ。参加者は各自の地域での保護観察、保護司の関係者であり、日頃は社会生活に復帰するための補導と援助に尽力されている。CPPAP 主催の夕食会は笑顔と暖かい“マブハイ”の言葉につつまれた楽しい会となった

何といっても厳しいスケジュールは22日(金)。早朝から我々のバスは2台の白バイに先導され、どこに行くのにもVIP扱いだった。フィリピン・日本 Halfway House の視察。

女子刑務所では、1,200人以上が共同生活をしている。オレンジ色のTシャツで皆日本人を珍しそうに見ていた。バトンガールがマーチングバンドで元気よく歓迎してくれた。

保護局訪問では、Dr. Manuel G. Co 氏の挨拶と詳しい説明があった。

国家警察委員会 (NAPOLCOM) 表敬訪問でも、また全員起立し国歌斉唱で始まり、とても厳かな雰囲気だった。NAPOLCOM の Comm. Zenonida F. Brosas 氏の歓迎の挨拶と対面式があり、また心憎いタイミングで“おもてなし (NAPOLCOM 職員グループによるコーラス)”があった。

日本の交番システムやボランティア保護司制度などがフィリピンでも活用されている様子だ。日本は“安全な国”と世界に知られている。いうまでもなく、これは警察、行政、法務省、保護司関係者のたまものだと思った。

個人的であるが、Halfway House 訪問の際、約30年前に UNAFEI の Home Visit のプログラムで来宅したモラレス女史 (現在は矯正局矯正部長) と偶然再会した。30年前一緒に写した写真を見せたら、驚きの声をあげて喜んでくれた。感動の一瞬だった。

この企画の関係者には心からお礼を申し上げたい。

【フェルドン矯正局長から刑務作業品贈呈

右がモラレス矯正部長】

